

## 実践力育成科目における多文化体験活動の意義

真島 聖子<sup>1)</sup> 永井敦子<sup>2)</sup> 加藤史<sup>2)</sup>

社会科学教育講座<sup>1)</sup> 多文化体験活動コーディネーター<sup>2)</sup>

### The significance of multicultural experience activities in practical skills development subjects

Kiyoko MAJIMA<sup>1)</sup> Atsuko NAGAI<sup>2)</sup> Fuhito KATO<sup>2)</sup>

1)Department of Social Studies, Aichi University of Education, Kariya448-8542, Japan

2)Aichi University of Education, Kariya448-8542, Japan

Keywords：実践力育成科目 多文化体験活動 実践型カリキュラム

#### I はじめに

愛知教育大学では、2017年4月に2つの大きな改革を実施した。1つは、教育学部を改組して、新たに「教育支援専門職養成課程」を開設したことである。もう一つは、既存の「教員養成課程」と新たに開設した「教育支援専門職養成課程」の2つの課程に所属する学生が、共通して受講する共通科目として、「実践力育成科目」を開講したことである。なぜ、同じ時期に2つの改革が実施されたのだろうか。

その背景には、「大学改革実行プラン」(2012年6月文部科学省)、「これからの大学教育等の在り方について(第三次提言)」(2013年5月28日教育再生実行会議)、「日本再興戦略」(2013年6月14日閣議決定)、「教育振興基本計画」(2013年6月14日閣議決定)等を踏まえて今後の国立大学改革の方針や方策、実施方針をまとめた「国立大学改革プラン」(2013年11月文部科学省)がある。

第2次安倍内閣における私的諮問機関である教育再生実行会議がまとめた「これからの大学教育等の在り方について(第三次提言)」では、教員養成大学の改革について、次のように述べている<sup>①)</sup>。

「初等中等教育を担う教員の質の向上のため、教員養成大学・学部については、量的整備から質的充実への転換を図る観点から、各大学の実態を踏まえつつ、学校現場での指導経験のある大学教員の採用増、実践型のカリキュラムへの転換、組織編成の抜本的見直し・強化を強力に推進する。また、学生の学校現場でのボランティア活動を推進するなど、大学と学校現場

との連携を強化する」(下線部は筆者による)。

ここでは、量的整備から質的充実への転換を図る観点から、実践型のカリキュラムへの転換と組織編成の抜本的な見直し・強化などが、初等中等教育を担う教員の質の向上のための方針として示された。

また、こうした方針を受けて、「国立大学改革プラン」の参考資料には、教員養成大学の「ミッションの再定義」について、次のように記されている<sup>②)</sup>。

「振興の観点：国立大学の教員養成大学・学部については、今後の人口動態・教員採用需要等を踏まえ量的縮小を図りつつ、初等中等教育を担う教員の質の向上のため機能強化を図る。考え方：①教職大学院への重点化等(新課程の廃止など組織編成の抜本的見直し) ②実践型のカリキュラムへの転換(学校現場での実践的な学修の強化) ③学校現場での指導経験のある大学教員の採用増」(下線部は筆者による)。

この「国立大学改革プラン」で示された「ミッションの再定義」を進める過程で、愛知教育大学では、教員免許の取得を卒業要件に課さないいわゆる「ゼロ免」課程を廃止し、教育を支援する専門職であるスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、教育行政職員、学校事務職員の養成に取り組む「教育支援専門職養成課程」を新設した。これは、教育を支援する専門職が、教員とともにチームをつくり、学校全体で子どもたちの豊かな学びを実現する「チーム学校」を養成段階から具現化したものである。

また、「実践型カリキュラムへの転換」の方針を受けて、新たに実践力育成科目を開講した。この実践力育

成科目とは、学校現場などでの諸活動を通じて、多様な子どもたちの生活環境に直接触れたり、感性を磨いたりすることで、豊かな人間性と現代的諸課題への対応力に優れた専門職業人を育成することを目的とした科目である。

実践力育成科目は、1年前期に「学校体験活動入門」、2年後期に「学校体験活動Ⅰ」を必修科目として履修した後、3・4年次には「学校体験活動Ⅱ」、「自然体験活動」、「多文化体験活動」、「企業体験活動」の4つの体験活動から1つを選択して履修する。1年次、2年次、3・4年次と段階的に学修を積み重ねて、実践的な学びを深めていくカリキュラム構造となっている。

本稿では、この実践力育成科目における多文化体験活動について取り上げる。多文化体験活動とは、アジアの協定校等で海外の子どもの生活や教育の実態を肌で感じることを通して、より一層子ども理解を深め、教職や教育を支える専門職等への意欲を高めることを目的とする授業である。この授業を通して、学生はどのような学びを得たのか、多文化体験活動後の学生アンケートを基に、実践力育成科目における多文化体験活動の意義とは何かを明らかにする。

## Ⅱ 多文化体験活動の概要

### 1 多文化体験活動の実施計画

多文化体験活動の目的は、次の3点である。(1) 自国とは異なる環境や文化、歴史を持つ国を訪問し、教育の原点や価値を自ら見出す。(2) 外国の言葉や文化に触れることで、学ぶ必要性を実感し、大学での学びにつなげる。(3) 様々な文化・宗教を背景とした人々と交流し、多様性を受け入れる素地を作る。

活動先は、アジアを中心とした協定校等のある地域で、定員は、一つのプログラムにつき、原則15名程度である。活動期間は、現地までの移動を含めて7日間である。活動時期は、学部2年後期の授業終了後

(3月)に設定し、学部3年次に単位を認定する。単位は、1単位とし、評価は可否で認定する。

すべてのコースに共通した活動内容は、次の4点である。(1) 事前指導・準備として、現地の歴史、文化、宗教、教育、社会情勢等について調べ、レポートを作成する他、現地の子どもたちや大学生との交流で日本文化等を紹介できるようにする。(2) 現地での学習・体験として、幼稚園・小学校・中学校・高等学校・大学等の教育機関を訪問し、授業や学校生活の様子を観察する他、現地の文化を体験したり、歴史遺跡・博物館・美術館等を見学したりする。(3) 現地での交流として、幼稚園・小学校・中学校・高等学校・大学等の教育機関を訪問し、日本の文化等の紹介を通して、子どもたちや大学生と交流をする。(4) 事後指導として、多文化体験活動の振り返りを行い、アンケ

ートや報告書を作成する。

渡航費・滞在費は、受講生の負担であるが、経済的状况によっては、奨学金制度の支援を受けることも可能である。多文化体験活動の年間スケジュールは、以下の表1にまとめた。学生は、多文化体験活動の案内や説明会を経て訪問先の希望アンケートを記入し、面接及び調整によって参加するプログラムを決定する。

表1：多文化体験活動の年間スケジュール

2017. 11. 1	多文化体験活動の案内 (1年次)
2018. 4. 18	多文化活動説明会① (2年次)
2018. 5. 23	多文化活動説明会②
2018. 6. 1	最終希望調査提出期限
2018. 6. 13 ～20	A コース面接
2018. 6. 27 ～29	B コース面接
2018. 7. 11	選考結果発表(コース日程・奨学金予告)
2018. 7. 18	コース再希望調査提出期限
2018. 7. 20	受講コース最終発表
2018. 7. 23	受講コース最終決定通知
2018. 8. 17	費用発表・奨学金・参加フォーム・パスポート・保険
2018. 8. 28	夏の説明会 A・B (費用・奨学金・参加フォーム・パスポート・保険)
2018. 9. 4	Bコース事前調査(カンボジア・タイ・フィリピン・マレーシア)
2018. 11. 7	渡航に関する説明会 (危機管理、危機回避、健康管理、心構え)
2018. 11. 12 ～15	第一回事前指導
2019. 1	第二回事前指導
2019. 3	多文化体験活動 アンケート調査
2019. 4	レポート提出 (3年次)
2019. 4	事後指導 (3年次)
2019. 5. 22	報告会 次年度の学生へプレゼンテーション (3年次)

### 2 コースの概要

#### (1) 各コースの日程と参加人数

コースは、当初、50名程度の参加者を見込んで協定校との交流を中心としたAコースを準備していたが、説明会後の希望調査の結果、300名を超える参加希望者となったため、旅行会社の企画による協定校以外のBコースを設定した。再度説明会を開催し、各コ

ースの担当教員による面接を経て、最終的には、193名の学生が多文化体験活動に参加した。各コースの日程と参加人数は表2の通りである。

表2：各コースの日程と参加人数の一覧表

コース	日程	人数
A1 カンボジア	2019. 3. 13(水)～ 2019. 3. 19(火)	9
A2 インドネシア	2019. 3. 11(月)～ 2019. 3. 18(月)	10
A3 タイ	2019. 3. 13(水)～ 2019. 3. 19(火)	18
A4 ベトナム	2019. 3. 13(水)～ 2019. 3. 20(水)	16
A5 モンゴル	2019. 3. 8(金)～ 2019. 3. 14(木)	17
A6 韓国(光州)	2019. 3. 13(水)～ 2019. 3. 20(水)	9
A7 台湾	2019. 3. 13(水)～ 2019. 3. 18(月)	7
A8 中国	2019. 3. 6(水)～ 2019. 3. 13(水)	2
B1 カンボジア1班	2019. 3. 6(水)～ 2019. 3. 11(月)	13
B1 カンボジア2班	2019. 3. 13(水)～ 2019. 3. 18(月)	9
B2 タイ1班	2019. 3. 6(水)～ 2019. 3. 11(月)	16
B2 タイ2班	2019. 3. 13(水)～ 2019. 3. 18(月)	16
B3 フィリピン	2019. 3. 6(水)～ 2019. 3. 11(月)	29
B4 マレーシア	2019. 3. 6(水)～ 2019. 3. 11(月)	22

## (2) 各コースのプログラムの特色

各コースのプログラムの特色については、担当する教員等によって作成された説明会での紹介文を以下に示す。

### ① A1 カンボジア

本プログラムでは、プノンペンでは、協定校である国立教育研究所の附属小学校・中学校での授業観察および現地学生との交流を実施する。また、ポルポト政権下で刑務所であったトゥール・スレン博物館の見学を予定している。シェムリアップでは、教員養成学校であるPTTC附属小学校・中学校での授業観察および現地学生との交流を実施する。また、9世紀から続いた王朝時代の世界文化遺産が多数存在するため、ア

ンコールワットなどの遺跡群を見学する予定である。なお、現地学校の始業は7時30分のため、早朝から活動を実施する。

### ② A2 インドネシア

本プログラムは、本学と交流協定を結んでいる国立ジョグジャカルタ大学と連携したプログラムである。滞在するジョグジャカルタは、インドネシアの古都であり学生の町で、歴史と活気に満ちている。活動は、1) 現地小学校の訪問(児童・教員との交流、文化紹介)、2) 大学の授業への参加、3) 伝統工芸体験(バティック制作)、4) 世界遺産(ボロブドゥール遺跡、プランバナン寺院群)見学、5) 地元のフィールドワーク、6) ホームステイ、などを行う。同大学からは、最近毎年1、2名の学生が本学に長期留学している。また、昨年からは短期滞在研修交流も行っているため、愛教大のことを良く知り、愛着を持ってくれている学生が多く、学生同士で密な交流ができる。また、滞在中、イスラム教文化を肌で感じることも大きな特色の一つである。

### ③ A3 タイ

タイ北部の街チェンライにある愛教大の協定校チェンライ・ラチャパット大学(CRRU)とは、長年にわたって交流があり、本プログラムもCRRU日本語学科の学生・教員の協力のもとに成り立っている。タイ(特に北部)の文化、歴史を知るだけでなく、同世代のタイ人との交流を通じて、お互いの日常生活、興味・関心を共有することができる。一方で、タイ人の学生たちにとっても、日本人学生との交流は、日本語を使って日本を知る貴重な機会であり、日本語キャンプをはじめとして、楽しい時間を過ごせるような様々なアクティビティを準備してくれる。このような交流を通じて、一時的な「ゲスト・ホスト」という関係で終わらない、得がたい体験となるプログラムである。なお、3月は小中学校が休みのため、授業見学などは難しいが、子供たちと触れあう機会を考えている。

### ④ A4 ベトナム

本プログラムでは、本学の協定校の一つであるハノイ国立教育大学を中心に、その附属学校やハノイ市内の公立・私立小中学校を訪問し、授業観察および日本文化を題材とした交流活動などを実施する。また、古代王宮の遺跡、軍事博物館、水上人形劇などの見学を通して、ベトナムの歴史・文化に触れる。

### ⑤ A5 モンゴル

本プログラムでは、ウランバートル市内の小・中・高等学校の授業や施設を見学したり、子どもたちと交流したりするほか、本学と学術交流協定を締結し

ているモンゴル国立教育大学も訪問し、その学生と交流する。また、乗馬体験、ゲル（伝統の移動式住居）訪問、美しい満天の星空観察、広大な草原散策など、普段の日本国内での活動では得ることのできない貴重な体験をすることができる。

#### ⑥ A6 韓国（光州）

本プログラムでは、光州教育大学校附設小学校や現地小学校での授業見学や参加体験、給食体験、光州教育大の学生たちとの交流の他、国立アジア文化殿堂、国立光州博物館、5・18 記念文化館、光州市立美術館等を訪問する。光州へは仁川（ソウル）からのルートもあるが、本プログラムでは金海（釜山）からのルートを選び、釜山市内での両替や宿探し体験等「自分の頭で考え、自分の口で話し、自分の足で歩く」チャレンジの場も提供する。

#### ⑦ A7 台湾

国立台湾聯合大学は、台湾中部の「苗栗市」にある総合大学で、以下の5つの院と研究センターが設置されている。（理工学院、電気データ学院、管理学院、客家学院、人文社会学院）大学の前身が私立聯合工業技術芸専科学校であるため、理系の学部が強い。このような聯合大学の特徴を生かし、本プログラムでは、ものづくり実習や理系の授業体験を中心に、中国語講座や博物館、観光スポットなどへの訪問を行う。

#### ⑧ A8 中国

本プログラムの目的は、履修した中国語の基礎的知識の強化、日常会話用語の習得、中国社会や中国文化施設への理解及び相互認識・相互理解の推進にある。研修参加者には語学力応用の実践によって、習得した中国語の会話力を向上させ、相互理解・相互交流の重要性が認識できるようにすることが目標である。人間社会の多様性と異質性、世の中の物事の共通点と相違点、考え方や見方の違いなどについて正しく理解し、想像した世界と現実の社会とのギャップを縮めることができるようにする。中国の大学生の勉強ぶりに刺激を受け、より一層勉学できるように働きかける。交流を通じて、中国語・中国文化・中国社会への理解を深め、国際感覚のある大学生に成長するよう期待する。

#### ⑨ B1 カンボジア1班、2班

本プログラムでは、シェムリアップ州内の小学校（または中学校）の授業や孤児院の支援活動を観察したり、子どもたちと交流したりするほか、世界文化遺産、地雷博物館、女性の職業自立施設などの観察を通して、カンボジアの歴史や文化、平和への願い、生活習慣、社会経済、自然環境などに触れ、文化の多様性

について考察する。

#### ⑩ B2 タイ1班、2班

本プログラムでは、現地小学校（または中学校）の授業や貧困地域の孤児スクールを観察したり、子どもたちや日本語を学ぶ若者と交流したりするほか、世界遺産、水上マーケットなどの観察を通して、タイの歴史や文化、生活習慣、社会経済、自然環境などに触れ、文化の多様性について考察する。

#### ⑪ B3 フィリピン

本プログラムでは、セブ島内の小学校（または中学校）の授業や貧困地域の学童保育活動を観察したり、子どもたちと交流したりするほか、農業や工場、リゾート地の観光産業、ゴミ山で暮らす住民の生活などの観察を通して、フィリピンの歴史や文化、生活習慣、社会経済、自然環境などに触れ、文化の多様性について考察する。

#### ⑫ B4 マレーシア

本プログラムでは、現地小学校（または中学校）の授業を観察したり、現地の学生や住民と交流したりするほか、熱帯雨林、急速に進む開発と自然保護、農村文化などの観察を通して、マレーシアの歴史や文化、生活習慣、社会経済、自然環境などに触れ、文化の多様性や多民族の共生について考察する。

### Ⅲ 学生アンケートの結果と分析

多文化体験活動に参加した193名の学生を対象に、多文化体験活動後の2019年3月にアンケート調査を行った結果、192名の学生からの回答を得た。アンケート項目は、以下の9つで、大いにできた、ややできた、あまりできなかった、全くできなかった、の4つのうちから1つ選択する4件法を採った。また、それぞれの項目については、その理由を自由に記述する欄を設けた。以下では、問1から問9までのアンケート項目とその結果を人数と%で示した。また、多文化体験活動の授業目標に関する自己評価に該当する問1～問3に関しては、学生の自由記述を取り上げて紹介した。なお、下線部はすべて筆者による。

#### （1）授業目標に関する学生の自己評価

【問1】 自国とは異なる環境や文化、歴史を持つ国を訪問し、教育の原点や価値を自ら見出すことができましたか？

大いにできた	113人	59%
ややできた	67人	35%
あまりできなかった	12人	6%

全くできなかった	0人	0%
----------	----	----

問1の結果から、全体の約6割の学生が「教育の原点や価値を自ら見出す」ことを「大いにできた」と答えており、「ややできた」も含めると、94%の学生が、自国とは異なる環境や文化、歴史を持つ国を訪問し、教育の原点や価値を自ら見出すことができたことと答えている。このことから、授業目標の(1)はおおむね達成できたと考えられる。これは以下の学生の自由記述からも明らかとなった。学生の多くは、困難な環境に置かれていてもひたむきに学ぶ現地の子どもたちの姿や言葉がうまく伝わらない中でも積極的に関わってくれる子どもたちとの交流を通して、教育の原点や価値を見出したり、教師の果たす役割について考え直したりしている。

[A1 カンボジア]「カンボジアの学校は、お世辞にも綺麗とは言えない状態で衝撃を受けました。しかし、そんな環境の中でも一生懸命に学業に励んでいる子どもたちの姿を見て、感動しました。学校の環境だけではありません。子どもたちの中には、恐らく貧困の理由からか、筆箱を所持せずにポケットにペンを2、3本入れて持ち歩いている子どももいました。日本ならば、貧富の差はあれども筆箱の所持が可能な子どもがほとんどだと思います。そういった決して恵まれているとは言い難い環境の中でも一生懸命に学業に向き合っている子どもたちに対して、教育者も同じように一生懸命に向き合っていかなければならないと強く感じました」

[A3 タイ]「自国との環境、文化の違いを目の当たりにして、日本より生活水準が低いであろう国の人たちは、日本人よりも自己肯定感が高く、自分に自信をもって過ごしているのを見て、子どもたちにどうかかわれば、子供たちの自己肯定感を高め、積極的に動けるようにできるのかという課題を発見できたから。」

[A4 ベトナム]「日本での当たり前とベトナムでの当たり前は、ここまで違うのかということの大いに体験できた。また、勉強に取り組む目的や姿勢が、日本より積極的であることが見受けられた。日本では、当り前に勉強できる環境が整っているが、その環境に甘えて勉強を疎かにしがちだが、ベトナムでは十分な環境が与えられていないなかで、一生懸命に取り組んでいると感じた。この姿勢を持つベトナムの子達にしっかりと集中して取り組める環境を整えてあげられたら、どう発展していくのか興味が芽生えるようになったから」

[A5 モンゴル]「モンゴルには、遊牧民と遊牧をやめて都市部の郊外に拠点を構え暮らしている者、都市部に住んでいる者の大きく3つに分けられ、教育だけに関わらず貧富の差が大きく見られた。親日国とい

うこともあり、日本語学部などが併設されていたり、モンゴルの風土に合ったことを研究する学部のある大学や、第2、第3言語として日本語を取り入れている小中学校を訪問したことを通して、教育というものがどのように人々の暮らしを豊かにしているのかを考えさせられた」

[A6 韓国]「教育において、コミュニケーションがとても大切であることを痛感した。韓国の小学校で模擬授業を行ったが、英語で説明した際、通じない場面があり、何度も説明する状況に陥った。説明をしている2人の学生を除き9人も先生役の学生がいるのに言語が通じないため、上手く補助ができなかった。私は子供達の言語も分からないため、子供達が何が分からないで困っているかを理解できないことに、もどかしさを感じた。また、言葉の壁を前にして、怖じ気づいてしまい子供達に積極的に指導できない自分がいて、言語の習得の大切さを学んだ。」

[A7 台湾]「小学校を訪問したのですが、プログラミング教育が進んでいることを知りました。日本でこれから進めていくプログラミング教育が、台湾では当たり前に行われていることに驚きました。他国の教育を尊重し、見習っていくことも、日本の教育を発展していくのに重要だと思いました」

[B1 カンボジア]「こちらは、子どもたちにとって身近な人間ではなく、また言葉も通じないにも関わらず、用意した教材に、子どもたちが目を輝かせて教材に取り組む姿が見られ、子どもの『学びたい』と思う気持ちを引き出すことができたように思われたから・一人ひとりに寄り添った声のかけ方をすることで、子どもがより意欲的に活動に取り組めるようになり、子どもの『学びたい』と思う気持ちを引き出すことができたように思われたから」

[B2 タイ]「タイは日本と気候が異なり、生活習慣も異なっていた。遺跡を周り、かつての紛争の悲惨さを感じた。その一方でタイの人々の生活からは、時の流れのゆるやかさも感じる事が出来た。タイの人々の暮らしをみて、裕福な暮らしの人もいれば、地べたで生活しているような人々もおり、生きる事そのものが学びなのでないのかと考えた。よりよく生きるためにどうすればよいかを考え続けることに教育の原点があるのだと感じた」

[B3 フィリピン]「実際に現地の学校へ見学に行った際に、授業の中で多くの生徒が自分の意見を積極的に発することが出来るような場面が多く見られた部分から、教育の価値は、知識を与えることだけにあるのではなく、社会に出てからの能力を育成することにもあるのだと感じることができたから」

[B4 マレーシア]「マレーシアは多民族国家であるため、その共通語には英語を採用し、学校教育で英語を学ぶ。そのため、小学校に通う年齢の子どもはいか

にも習っている最中の英語力で話していた。小学校で習ったから英語が使える、どんどん学び続けていくことで英語力が向上していくというのを見ていて感じられ、学ぶことという教育の原点のようなものを感じられたと思う」

【問2】外国の言葉や文化に触れることで、学ぶ必要性を実感し、大学での学びにつなげるきっかけになりましたか？

大いにできた	133人	69%
ややできた	54人	28%
あまりできなかった	5人	3%
全くできなかった	0人	0%

問2の結果から、約7割の学生が「大いにできた」と回答し、「ややできた」も含めると97%の学生が、外国の言葉や文化に触れることで、学ぶ必要性を実感し、大学での学びにつなげるきっかけになったことがわかる。このことから、授業目標の(2)はおおむね達成できたと考えられる。これは、以下の学生の自由記述からも明らかである。多くの学生が言葉の壁にぶつかり、悔しい思いをした経験やもっと話したいという思いから、学ぶ必要性を実感し、学ぶ意欲の向上につながったといえる。

【A1 カンボジア】「私は、英語という壁に大きくぶつかりました。それなりに英語は勉強してきたつもりでしたが、実際に英語を使うとなると、相手の英語を聞き取ることができなかつたり、英単語が瞬時に出てこなかつたりと苦労の連続でした。伝えたいことがあるのに、それを上手に伝えることのできなかつた悔しさは、きっと忘れることはないでしょう。大学生活の中で、今後はもっと多言語の学習を深めていきたいと思います。」

【A2 インドネシア】「今回様々な人や文化と関わり、自分の知らない世界がまだまだたくさんあると知りました。狭い世界にいると価値観も偏ったものになってしまうので、もっと自分の知らないことを知りたいと思いました。そのためには、もっとコミュニケーションを取るための言語の勉強をしなければならないと思いました。」

【A3 タイ】「タイ人学生の日本に対する気持ちと、それに伴って日本語を必死に勉強したいという気持ちがひしひしと伝わってきて、本気で勉強しているのだなど感じたし、その分、私達は大学生の時間を『人生の夏休み』などと言っているのにとっても惨めに思った。」

【A4 ベトナム】「ベトナムの多くの小学校はオール

イングリッシュで授業をし、普段話す言葉も英語です。彼らより年が上の私たちでも、彼らほど流暢に英語を話すことができません。日本の教育の発達の遅さを痛感し、今自分が何を考え取り組めばいいのか、しっかりと考えることができました。」

【A5 モンゴル】「外国の言語を知っているだけで、ちょっとした言葉のニュアンスなども感じ取ることが出来、話す相手の言いたいこと、伝えたいことがよくわかるのは素晴らしいことだと思い、もっと違う言語をたくさん学びたいと思った。」

【A6 韓国】「現地の大学で韓国の学生とペア行動をしたが、なかなか意思疎通がうまくいかない時もあり、自分の語学力のなさを実感した。最後、パティの学生と別れるとき、感謝と寂しさでとても名残り惜しかったがその気持ちをうまく伝えることが出来ず、悔しかった。語学は、やはり異国で意思疎通をはかる際に大切な手段であることを感じたので、この経験は語学の学習をする原動力になりそうだ。」

【A7 台湾】「現地の大学生は英語を使いこなしていました。それに対して私は聞き取ることもままならず、コミュニケーションがとても難しかったです。英語を読み書きできても、リスニングができなかつたコミュニケーションは上手くないし、自分で文章を作らなければ、意味がないことがわかり、もっと勉強するべきだと強く思いました。」

【A8 中国】「人とのコミュニケーションをとる中で言語の必要性を感じたから。特に現在、中国人の訪日客が増えているので中国語を学ぶ必要性を感じた。」

【B1 カンボジア】「カンボジアでは観光業が盛んな為、言語学習が将来の仕事に直結するということが分かり、日本で今行っている外国語活動も将来の仕事として何かしらの役に立つ場面があると分かった。英語が国際的に使われていて、観光やビジネスで多国籍の人が行き交う社会なので、英語を勉強する必要性が分かった。」

【B2 タイ】「タイの子どもたちと交流するにあたり、言葉が通じないことによるもどかしさや悲しさを感じる場面が多くありました。しかし同時に、言葉に頼らないコミュニケーションの大切さを実感し、それは多くの人との交流を通して身につけていくものであると感じました。教師にとって大切なのは子どもを知ろうとする心であり、たとえ言葉が通じなくとも教師の態度や向き合う姿勢によって分かり合えることを実感しました。今後の教育実習等を通して、子どもたちとの関わり方についてさらに深く学んでいきたい。」

【B3 フィリピン】「ジェスチャーや表情で相手とコミュニケーションをとることは少しできたが、微かな気持ちの違いなどは伝えることができなかったと思う。英語だけでなく、その国の歴史や日本とのつながりを深く知っておくべきであった。今までは日本の教

育にしか目を向けていなかった。学校教育が発展していく上で、他国との交流が密になると考えられる。教育の視野を広げなければならないと思った。

[B4 マレーシア]「相手の言葉を聞き取れないと、コミュニケーションが成立しないということに改めて気づくことができました。多く民族がおり、さまざまな訛った英語が飛び交う中で、聞き取る、リスニングの力は大切だと感じた。」

【問3】様々な文化・宗教を背景とした人々と交流し、多様性を受け入れる素地を作ることができましたか？

大いにできた	145人	75%
ややできた	44人	23%
あまりできなかった	2人	1%
全くできなかった	1人	1%

問3については、75%の学生が「大いにできた」と回答し、「ややできた」も含めると98%の学生が、様々な文化・宗教を背景とした人々と交流し、多様性を受け入れる素地を作ることができたと回答している。このことから、授業目標の(3)はおおむね達成できたと考えられる。以下の学生の自由記述からも、日本の当たり前が世界では当たり前ではないことについて気づいたことで、それぞれの国や地域の文化や宗教的背景への理解へとつながったことがわかる。

[A1 カンボジア]「カンボジアの方々は、自分たちの国が歩んできた暗い過去を受け入れ、もう2度と繰り返さないように、と強く思う気持ちも持っていてすごいと思いました。また、神様を崇拝する気持ちも強く、1つ1つの教室に神様がそれぞれ祀られているのを目にした時、正直衝撃を受けましたが、子どもたちや教師の方々が神様を大切にしているということが言動や行動から感じ取られ、とても素晴らしいことだと思いました。」

[A2 インドネシア]「インドネシアでは、イスラム教の人がいればそうでない人もいました。でも、そのことについて現地の人は、お互いを理解し合っているように思えました。新しい宗教や文化には、初めはとても驚くことがあるが、日本の文化も私たちにとって普通であると同様に現地の人にとってそれが普通であるということを感じることができました。」

[A3 タイ]「日本より宗教が身近にある様子を目の当たりにして、宗教について考えることができた。また交流を通して日本と違う価値観、習慣があることを強く感じた。実際にそのような体験をしたことで、改めて自分と同じ文化や習慣が絶対でないということに

気づいた。」

[A4 ベトナム]「日本と違うことがたくさんあり、例えばバイクがたくさんの中、ぶつからないように上手く歩くこと、飲食店で箸やスプーンを紙で拭くこと、など、初めは戸惑ったが、7日間もいると慣れてきて、それがこの国で普通なんだ、と受け入れることができたから。」

[A6 韓国]「こちらが日本人だと分かっても冷たくされるということはなく、現地のだの人もあたたかく接してくれたから。ニュースでよく報道されているような反日感情を抱いている人ばかりがいるわけではないのだと学んだ。」

[A7 台湾]「以前SVで台湾に行った時の観光名所の説明をしてくださるガイドさんと今回のガイドさんでは説明がすこし違ったりと、歴史に対する考えが様々であると知ることができた。」

[B1 カンボジア]「『他文化に先入観を持ったり、疎外したりしてならない』とわかっているけど、いざ受け入れるとなると難しい。そのため、今回カンボジアという一部ではあるが、ほかの国の文化の中に入り込み、自分のあたりまえが通用しない中で生活する経験ができたことは、知識から理解につながる経験になったと思うから。」

[B2 タイ]「お店に普通にニューハーフの人がいた。日本だと変な目で見られてしまいがちだが、タイでは普通のことだった。ニューハーフのショーも普通に行われていて大人気だし、日本と違って性の多様性が受け入れられていていいなあと思った。」

[B3 フィリピン]「色々な理由でスラムにすんでいる人々を見たり、その一方で裕福に暮らしている人々も見た。そんな格差社会のなかでも学校はみんな一律に授業を受けている。いろいろな人がいることをしっかりと受け入れた上で教師としてサポートしていかなければならないなどと思った。」

[B4 マレーシア]「私は外国人だからといってわざわざ壁を作っていたと思った。多国籍社会を見て、特に学校で人種が違って何にも変わらない、むしろ変化を気にする必要はないのだと感じた。」

## (2) その他のアンケート結果

問4～問9についてのアンケート結果は、以下の通りである。また、問1から問9のアンケート結果をグラフ1に表した。全体的には、肯定的な回答を示しているが、問6(外国語を使ってコミュニケーションをとること)と問7(日本の文化や教育について紹介すること)については、「あまりできなかった」と回答する学生が一定数見られた。

【問4】海外の文化や歴史を体験できましたか？

大いにできた	161人	83%
ややできた	29人	15%
あまりできなかった	2人	1%
全くできなかった	0人	0%

【問5】海外の学校現場や教育施設を体験できましたか？

大いにできた	133人	69%
ややできた	51人	26%
あまりできなかった	8人	4%
全くできなかった	0人	0%

【問6】外国語を使ってコミュニケーションをとることができましたか？

大いにできた	39人	20%
ややできた	75人	39%
あまりできなかった	74人	38%
全くできなかった	4人	2%

【問7】日本の文化や教育について紹介できましたか？

大いにできた	67人	35%
ややできた	98人	51%
あまりできなかった	26人	13%
全くできなかった	1人	1%

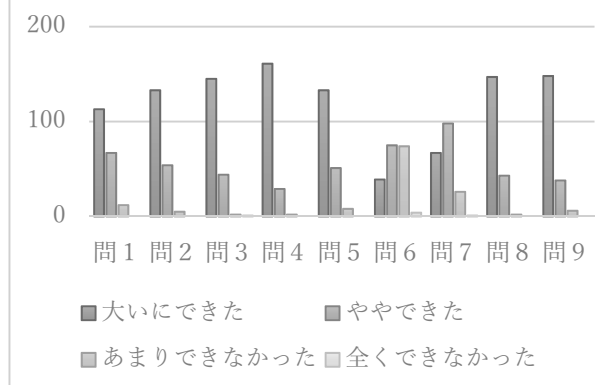
【問8】海外の子どもたちや大学生と交流できましたか？

大いにできた	147人	76%
ややできた	43人	22%
あまりできなかった	2人	1%
全くできなかった	0人	0%

【問9】他の課程・選修・専攻の学生と一緒に学ぶことができましたか？

大いにできた	148人	77%
ややできた	38人	20%
あまりできなかった	6人	3%
全くできなかった	0人	0%

グラフ1：多文化体験活動後の学生アンケートの結果



#### IV おわりに

実践力育成科目における多文化体験活動の意義は、日本の教育や社会文化のありようは、決して唯一絶対のものではなく、よりよい在り方は、多様に存在し得ることに気付き、自分自身の狭い視野や価値観を見つめ直し、より広い視野から物事を考え、多様な価値観を受け入れる素地を学生自らが獲得することにあるといえる。これは、日本から一步外に出て、現地の中で身置きを置かなければ、学びとして実感し得ないことである。実践力育成科目では、1年次、2年次の学校体験活動を基盤にして、3年次では、年間を通して学校現場に足を運び、子ども理解や教職・教育を支援する職業への理解を深める選択肢を保障するとともに、企業体験や自然体験、多文化体験などの学校以外の社会や世界に活動の場を広げて、社会との関わり、世界とのつながりから、日本の教育を見つめ直したり、問い直したりする活動も保障している。学生の選択判断を尊重した点も授業の効果を高めている。

今後の課題は、外国語学習や日本の文化や教育について紹介できるように多文化体験活動の事前学習を充実させるとともに、帰国後、学ぶ必要性を実感したあとに、学びを深めることができるような授業や活動を効果的に配置して、実践力育成科目と他の授業を有機的に連携させたカリキュラムを構築する必要がある。

#### 注

(1) 教育再生実行会議 (2013) 「これからの大学教育等の在り方について (第三次提言)」 p. 7。

[https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/pdf/dai3\\_1.pdf](https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/pdf/dai3_1.pdf) (最終アクセス 2019. 12. 1)

(2) 文部科学省「国立大学改革プラン 参考資料」p. 7。  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/houjin/\\_ics/Files/afieldfile/2019/06/17/1418116\\_02.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/houjin/_ics/Files/afieldfile/2019/06/17/1418116_02.pdf) (最終アクセス 2019. 12. 1)